

私立中学生の学び方の特徴と背景に関する実証的研究

西 島 央

I. はじめに

筆者が研究している部活動の見学などで全国の中学校や高校を訪問すると、先生方から「推薦入試やAO入試などの論文を書けるようにするためには、生徒にどのような学習をさせればよいのか」という趣旨の質問を受けることがある。推薦入試やAO入試などで課されることのある論文は、従来の教科の学習の枠に収まりきらないテーマが出題されることが多いからだ。

しかしそのことは、推薦入試やAO入試などの論文に限ったことではない。そもそも「総合的な学習の時間」が、教科の枠にとらわれず、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいにしている。教科の範囲でみても、全国学力・学習状況調査では、学んだ知識を実生活にまで結びつけることを求めている、いわゆる「活用」といわれる学力を測る問題を出している。また、大学入試全体でも、中教審が2014年12月に提出した答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」によれば、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する方向性が示され、そのために「合教科・科目型」「総合型」の問題を出題し、記述式で解答させることを採り入れようとしている¹⁾。さらに、OECD・DeSeCoが打ち出したキー・コンピテンシーでは、「道具を相互作用的に用いる」「異質な人々からなる集団で相互にかかわりあう」「自律的に行動する」の3つのカテゴリーが示されていて²⁾、これもまた従来の教科の枠内の「知識・技能」とは異なるといえよう。

中学校や高校の先生方が質問してくるように、このような能力は、従来の教科の枠内で従来のような学び方をしても十分に修得することができないものだろう。では、これからはどのような学び方が求められるのだろうか。もちろん、それを考えるためには、上述したほかにもさまざまな提出されている〈新しい能力〉のうち、日本の学校教育はどれを目指していくのかを明確にすることが必要だ。だが、まずは実際に取り組まれている学び方の特徴を検証し、教科の学びを深め、教科の枠を乗り越えるような学び方を考えるきっかけを見つけ出して、少しずつ実践することから始めるのが現実的だろう。

そこで本稿では、その一つのきっかけとなるべく、筆者が2012年度に首都圏の私立中学生

を対象に実施した質問紙調査のデータを用いて、私立中学生の学び方の特徴とその背景を探索的に記述し、多少なりとも知見と考慮すべき課題を示すこととしたい。

私立中学生は日本の中学生の中では1割にも満たない特殊な事例だ。しかし、一般に大学への進学実績ばかりが注目されがちだが、それぞれの学校が建学の理念などに従って、授業をきっかけにしたさらなる学びの機会を提供するなど、いわゆる5教科中心の学力以外のさまざまな能力を伸ばす工夫をしている側面もある。筆者が実施した質問紙調査も、そのような側面を描き出すことを目的の一つとしていたので、本稿の目的にかなう対象であると考えられる。そこでこの調査データを用いて、以下では、授業をきっかけにしたさらなる学びに取り組む私立中学生がどのような生徒なのかを、勉強の有用性認識と知的好奇心の2つの側面から検討し、さらにそれらの背景を探っていく。

Ⅱ. 調査概要

本調査は、筆者と森上教育研究所の共同調査として2012年度に首都圏の私立中学校2年生を対象に実施したものである。調査概要の詳細は以下のとおり。

①調査テーマ：首都圏の私立中学生の生活・意識・行動に関するアンケート

②調査対象：i. 生徒の進学状況（附属校，半進学校，進学校），ii. 男女別学共学，iii. 中学入試難易度（偏差値50未満，50台，60以上）（以下，「学校ランク」という指標で使用）の3つの指標の組み合わせからなる27のカテゴリーを設定し，機縁法に基づき首都圏の35校を抽出し，2年生5470名より回答を得た。

③サンプル規模：東京都内の私立中学生の約10分の1の規模となるように，上記27カテゴリーの実際の生徒数の比率をふまえてサンプル抽出し，2450名を調査分析の対象とした。

④調査実施時期：2012年10月～2013年1月。

⑤調査実施方法：教室内における集合自記式質問紙法。

Ⅲ. 分析と考察

1. 私立中学生の学び方のようす

はじめに，私立中学生の学び方のようすを概観しよう。授業への取り組み姿勢と，本稿で注目する授業をきっかけにしたさらなる学びへの取り組み状況について，図1～4に性別と学校ランク別にまとめた。

授業への取り組み姿勢として，国社数理英の授業にどのくらい積極的に参加しているかを尋ねた結果，女子はまじめだとか，学校ランクの高い学校の生徒はしっかり勉強しているといった一般的なイメージとは違って，図1のように性別や学校ランクの違いにかかわらず，「とても積極的」が2割前後，「まあ積極的」が6割強と，大半の生徒が授業に積極的に参加している³⁾。

中学受験を経たことで、私立中学生たちには広く、授業をちゃんと受けて勉強するという基本姿勢が身についているようすがうかがえる。

では、授業をきっかけにしたさらなる学びへの取り組み状況はどうだろうか。さらなる学びとして、「授業で興味を持った物事について、参考書などを使って知識を深める（以下、「知識深める」）」「先生に勧められた企画展や体験活動に参加する（以下、「企画展参加」）」「鑑賞教室など学校外での課外活動に積極的に参加する（以下、「課外活動参加」）」の3項目で尋ねた。

図2～4から、まず全体の傾向をみてみよう。「知識深める」は、「よくする」が1割前後、「ときどきする」が3割強で、合わせて4割くらいの生徒がしている。「企画展参加」は、「よくする」が5%以下、「ときどきする」が10%台で、合わせて2割前後の生徒がしている。「課外活動参加」は、「よくする」が5～10%、「ときどきする」が15%前後で、合わせて2～3割の生徒がしている。授業に積極的に参加している割合と比べると、授業をきっかけにしたさらなる学びに取り組む私立中学生はずいぶん少ない。

次に、性別と学校ランク別にみてみよう。性別では、興味深いことに、どの項目でも女子より男子のほうがさらなる学びをする傾向がみられる⁴⁾。この傾向は、男子校と女子校の間だけではなく、共学校でもみられた。なぜ同じ授業や指導を受けて、男子と女子でさらなる学びへの取り組みに差が出るのか、今後さらなる検証が必要だろう。学校ランク別では、「課外活動参加」は差がみられないが、「知識深める」と「企画展参加」では、学校ランク中位がやや低く、学校ランク下位がやや高いという傾向がみられる。学校ランクによって指導に違いがあることも考えられるが、2～4割の生徒しかさらなる学びをしていないことをふまえると、学校ランク差やそれぞれの学校の指導の違いだけでは説明できない背景がありそうだ。

2. 私立中学生の勉強の有用性認識

ここからは、授業に積極的に参加したりさらなる学びに取り組んだりする私立中学生がどのような生徒なのかを、勉強の有用性認識と知的好奇心の2つの側面から検討していこう。本項では勉強の有用性認識についてみていく。

荻谷によるインセンティブ・ディバイドの指摘⁵⁾にもあるように、近年では一定の層の子どもが学ぶ意欲・関心をもちにくくなっていることが教育上の問題の一つとされている。その中であって一般的なイメージとして私立中学生は学ぶ意欲・関心が高そうだが、私立中学生はなぜ勉強するのだろうか。勉強する理由について、「勉強が分かること自体が面白いから」（以下、「面白い」）という現在の有用性と、「学んだことはいずれ仕事や生活の役に立つと思うから」（以下、「役に立つ」）という将来的有用性に加えて、「みんながやるから、なんとなく当たり前と思って」（以下、「なんとなく」）を尋ね、結果を図5～7に性別と学校ランク別にまとめた。

「面白い」という理由に「とてもあてはまる」と回答した割合は、性別や学校ランク別を問

わず 10%前後だった。全体分布には、性別では有意な差はない。学校ランク別では、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合わせた肯定的な回答が中位で 43.9%と一番低い。

「役に立つ」という理由に「とてもあてはまる」と回答した割合は 3 割前後と 3 項目で一番高かった。大きな差ではないが、「とてもあてはまる」と回答した割合が、性別では男子 (26.7%) より女子 (30.6%) が、学校ランク別では上位 (27.0%) や中位 (26.6%) より下位 (32.2%) が高い。私立中学生にとって、将来的有用性を感じていることが勉強する一番の理由であり、とくに下位の生徒にその意識が高いのが特徴だ。

「なんとなく」という理由に「とてもあてはまる」と回答した割合は、性別や学校ランクを問わず 10%強だった。全体分布には、性別では有意な差はない。学校ランク別では、「まああてはまる」ではっきりした違いがみられ、下位 (37.9%) に比べて上位 (47.1%) と中位 (46.4%) は 10 ポイント以上高い。勉強の有用性認識と別に、いわばルーティーンのように勉強はするものだという姿勢が上位と中位の生徒により強くみられることは興味深い。

続いて、私立中学生の勉強の有用性認識をもう少し詳しく捉えるべく、3つの理由の関係をみてみよう。図 8 のように、「面白い」と「なんとなく」という勉強自体が目的となっている理由の肯定・否定の回答を組み合わせた、「面白く・なんとなく」「面白く・なんとなくでない」「面白くなく・なんとなく」「面白くなく・なんとなくでない」の 4 類型からなる「勉強自体目的」という変数を作り、その分布を性別と学校ランク別にまとめた。性別では、男子で「面白くなく・なんとなくでない」(23.1%) が、女子では「面白く・なんとなくでない」(26.5%) と「面白くなく・なんとなく」(32.6%) がややめだつ。学校ランク別では、上位で「面白く・なんとなく」(32.5%) が、中位では「面白くなく・なんとなく」(36.3%) が、下位では「面白くなく・なんとなくでない」(22.1%) がめだっている。

さらに、「役に立つ」という将来的有用性と「勉強自体目的」4 類型の関係を表 1 からみてみよう。「とても役に立つ」と思っている生徒は「面白く・なんとなくでない」が 37.1%で最も多い。「まあ役に立つ」だと「面白くなく・なんとなく」が 35.1%で最も多いが、「面白く・なんとなく」(28.0%) も「とても役に立つ」と同程度にいる。「あまり/まったく役に立たない」では、「面白い」という理由が大幅に少なくなり、とくに「まったく役立たない」では「面白くなく・なんとなくでない」が半数に上る。どうやら勉強する理由として現在の有用性と将来的有用性そしてルーティーンのどこに重きを置いているかで、私立中学生の授業への取り組み姿勢や、授業をきっかけにしたさらなる学びへの取り組み状況にも違いがみえてきそうだ。

3. 「勉強自体目的」と将来的有用性別にみた私立中学生の学び方のようす

そこで本項では、「勉強自体目的」と将来的有用性別に、私立中学生の授業への取り組み姿勢と、授業をきっかけにしたさらなる学びへの取り組み状況をみてみよう。「勉強自体目的」は前

項で作成した4類型で、将来的有用性は「役に立つ」を「とてもあてはまる」とその他の3つの指標をまとめた「まあ～まったく」の2類型で、それぞれ分析する。

まず図9から、国社数理英の授業に「とても積極的」に参加している割合をみてみよう。「勉強自体目的」では、「面白く・なんとなくでない」が33.8%で最も多い。続いて「面白く・なんとなく」が25.6%で、「面白くなく・なんとなく」と「面白くなく・なんとなくでない」は10%未満と、勉強が分かることが面白いかどうかで授業に向かう姿勢が大きく違っていることに加えて、「面白く」だけでなく「なんとなくでない」ことも授業に向かわせていることがわかる。将来的有用性では、「とてもあてはまる」は33.4%で「まあ～まったく」は13.5%と、将来的有用性認識が低い生徒は授業には積極的に参加しない様子が見えてくる。

次に図10から、授業をきっかけにしたさらなる学びをどのくらいしているかについて、取り組み率が一番高かった「知識深める」を例に、それを「よくする」割合をみてみよう。「勉強自体目的」では、「面白く・なんとなく」と「面白く・なんとなくでない」がどちらも約13%で、「面白くなく・なんとなく」と「面白くなく・なんとなくでない」がどちらも約4%と、勉強が分かることが面白いかどうかで、さらなる勉強をするかしないかが分かれている。将来的有用性では、「とてもあてはまる」は16.5%で「まあ～まったく」は5.7%と、将来的有用性認識が低いとさらなる学びには向かわないようだ。

さらに分析を深めて、「勉強自体目的」のうち「面白く・なんとなく」と「面白く・なんとなくでない」の2類型と将来的有用性を組み合わせて、授業に「とても積極的」に参加している割合と「知識深める」を「よくする」割合をみてみよう。図11～12から読み取れることは、第一に、勉強が分かることが面白かったとしても、将来的有用性認識が低ければ、授業への積極的な参加もさらなる学習をすることも半分ほどにまで少なくなっていることだ。第二に、そしてこちらに注目したいのだが、将来的有用性認識が低くても、勉強するのは「なんとなくでない」と、授業への積極的な参加は約8ポイント多くなっている一方で、さらなる学習を「よくする」については、勉強が分かることが面白く将来的有用性認識が高い生徒の中でも、勉強するのは「なんとなく」だと約7ポイント多くなっていることだ。

将来的有用性認識が低くても、「なんとなくでない」と授業に積極的に参加するのはわかるが、勉強が分かることが面白く将来的有用性認識が高い場合に、「なんとなく」だとさらなる学習をよくする傾向がみられることは興味深い。本調査の範囲ではこれ以上の分析をするのに適した変数がみあたらないが、今後、ルーティーンな学び方の功罪を探っていく価値はありそうだ。

4. 私立中学生の知的好奇心とその背景

今度は、授業に積極的に参加したりさらなる学びに取り組んだりする私立中学生がどのような生徒なのかを、知的好奇心からみていこう。前項までで勉強する理由の一つとして「勉強が

分かること自体が面白いから」を用いたが、それはどういうことか考えてみると、問題を解くときにあれこれ考えて工夫したり、正解だったときに達成感を感じたりするのが面白いということもあるだろう。だがそれとは別に、学びを通して自然や社会に対する理解が深まったり興味・関心が高まったりと、知的好奇心を刺激されて面白いということもあるのではないか。

そこで私立中学生の知的好奇心のようすを探るべく、「勉強をされていて次のように感じることはありませんか」という質問項目で、「生き物や自然を『すばらしい』『ふしぎだな』と感ずること」（以下、「自然すばらしい」）、「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』『ふしぎだな』と感ずること」（以下、「社会すばらしい」）、「数学の考え方や解き方を『すばらしい』『ふしぎだな』と感ずること」（以下、「数学すばらしい」）、「小説や古典を読んでいて、登場人物の気持ちや書いてある内容に興味をわいてくること」（以下、「小説興味わく」）がよくあるかどうかを尋ねた。図 13 のように、どの項目も「よくある」割合は 2 割前後で、「よくある」「ときどきある」を合わせて、勉強をされていて知的好奇心が刺激される私立中学生は 5 ～ 6 割だ。

では、知的好奇心と学び方の関係はどうなっているだろうか。両者は相互に影響し合う関係だろうが、本稿は学び方を探ることを目的としているので、知的好奇心を原因に置いて分析する。知的好奇心は「自然すばらしい」を例に、授業への取り組み姿勢と、授業をきっかけにしたさらなる学びへの取り組み状況をみてみよう。図 14 から国社数理英の授業に「とても積極的」に参加している割合をみてみると、「自然すばらしい」と感ずることが「まったくない」生徒では 8.4% しかいないが、感じる程度が増えるにつれて授業参加度も上がってきて、「よくある」生徒は 30.3% に上る。また、図 15 からさらなる学びとして「知識深める」を「よくする」と「ときどきする」割合をみてみると、「自然すばらしい」と感ずることが「まったくない」生徒では 15% ほどにすぎないが、「よくある」生徒は 55% ほどにも上っている。

なお、この傾向は「社会すばらしい」「数学すばらしい」「小説興味わく」でも同様にみられた。以上から、勉強を通して知的好奇心が刺激される私立中学生の方が、授業により積極的に、またさらなる学びにより多く取り組んでいることがわかった。だが、知的好奇心の強い子どもの方がより学ぶ傾向がある、というのは、当たり前といえば当たり前だ。むしろ大事なのは、どうしたら知的好奇心が豊かになり、それを学びにつないでいけるかということだろう。

そもそも知的好奇心は、「わからない」「知らない」「ふしぎな」ことにぶつかったり、生活していて「いやだな」「困ったな」と感じたりしたときに、その問題を解決しようとする欲求のようなものではないかと思う⁵⁾。だが、現代の私たちの生活でそのような困難な場面に遭遇することはそう多くはない。今の子どもが生活の中で知的好奇心を刺激されることは以前より少なくなっているだろう。だから、子どもが知的好奇心を刺激されるためには、例えば博物館に行ったり、美術館やコンサートやスポーツ観戦に行ったり、季節の行事に参加したりと、意識的な行動経験を通して「わからない」「知らない」「ふしぎな」ことを体験する必要があるようだ。

そこで、「博物館に行く」経験を例に、行動経験と知的好奇心の関係をみていこう。調査では、小学3～4年生の頃と中学2年生の調査時点とのそれぞれについて、上述の行動経験を1年間に何回くらい行っているかを尋ねた。行動経験回数が2つの時期で変わっている私立中学生もいるが、便宜的に両時期とも「ほとんどしない」「1～2日」「3～10日以上」の3タイプに絞って、「自然すばらしい」との関係をみたのが図16だ。

「自然すばらしい」と感じるものが「よくある」割合は、「博物館に行く」ことを「ほとんどしない」生徒では17.9%しかいないが、「3～10日以上」している生徒ではほぼ倍の35.4%に上る。この関係は他の行動経験でも同様にみられた。さまざまな行動経験を通して「わからない」「知らない」「ふしぎな」ことの体験を積んでいる私立中学生の方が知的好奇心を刺激される傾向があるといえる。そして実際、図17のように、小学生の頃から中学生の現在まで博物館に行くことの多い私立中学生ほど、さらなる学びの「知識深める」をすることも多いのだ。

5. 家庭の文化階層と行動経験の関係

知的好奇心を刺激し、そのことでさらなる学びにつながるのだから、子どものうちからさまざまな行動経験を積みそう、というのは、一見すると良いことのように思える。しかし、博物館に行ったり、美術館やコンサートやスポーツ観戦に行ったり、季節の行事に参加したりすることは、子ども自身だけでできることではない。とくに小学生の頃であれば、行動経験の多寡は、保護者がどれだけ子どもに経済面や教育面で関わるかにかかっている。また、博物館や美術館がどこにでもあるわけではない。つまり、家庭環境や地域環境の違いが、子どもが積める行動経験の違い＝格差につながっていく可能性があるのだ。

そこで、本調査では地域環境の違いを検討することはできないが、家庭環境の違いは家庭の文化階層を測る指標として蔵書量を尋ねているので、その項目を使って家庭の文化階層と行動経験の関係をみてみよう。図18のように、文化階層が下の方だと6割強が「博物館に行く」ことを「ほとんどしない」が、上の方だと6割が毎年「1～2日」ないし「3～10日以上」は「博物館に行く」ことをしていて、家庭の文化階層が上の私立中学生ほど博物館に行く経験をより積んでいることがわかる。なお、他の行動経験でも似たような傾向がみられた。

家庭の経済階層について十分なデータが得られなかったので、その点は推測せざるを得ないが、文化階層の高い家庭の保護者は一般に学歴が高く、子どもに対する教育期待も高いと言われている。そのような保護者が子どもを博物館に連れて行くなどして、さまざまな行動経験を積みさせているということは、本稿のここまでの分析と合わせて考えるならば、ペアレントクラシ어의存在を予想させると言えそうだ。

IV. まとめ

本稿では、推薦入試やAO入試などで課される論文に対応する学び方についての疑問をきっかけに、今後の大学入試やさまざまに提出されている〈新しい能力〉の方向性をふまえて、従来の教科の枠にとらわれないこれからの学び方を考えるきっかけの一つとして、現在取り組まれている学び方の特徴と背景を探ることを目的としていた。首都圏の私立中学生を対象にした質問紙調査のデータから、学び方については、授業には全般に積極的に参加しているものの、さらなる学びに取り組む割合はずいぶん少ないことがわかった。そして、授業やさらなる学びに取り組む背景としては、現在の有用性や将来的有用性を強く認識しているかどうかという、これまでも検証されてきている要因に加えて、「なんとなく」という学ぶことがルーティーンになっているあり方が浮かび上がってきた。また、知的好奇心が豊かかどうかも要因であるが、知己好奇心には子どもの頃からの行動体験の多寡が影響していることもわかった。

これからの学び方としては、本稿でさらなる学びの具体例として示したようなものがおそらく増えていくであろう。そのような学びは、従来の教科の枠内での学び以上に将来的有用性が見えにくくなるだろう。本稿の知見をふまえるなら、それに向けて、「なんとなく」とは何なのか、その功罪を見極めるような検証を行い、その成果を活かして、ルーティーン化した学びのあり方や動機づけ方を模索していくことも考えられるだろう。

また、もし行動経験を積むことで知的好奇心が刺激され、さらなる学びに取り組むことにつながり、結果として従来の教科の枠にとらわれない学力、とくに今後の大学入試で求められる学力をつけていたり、さまざまに提出されている〈新しい能力〉を獲得していたりするのであれば、それは家庭環境の違いによる教育格差を隠しもった学力や〈新しい能力〉になってしまう危険性がある。とくに大学入試で求められる学力に関して、新たな「公正性」を謳うのであれば、家庭環境の違いや、場合によっては地域環境の違いによる格差が含みこまれないように配慮した評価のしかたや、格差を少しでも縮減するような学校での教育のあり方を検討し、指導に取り組んでいくことが強く求められる。

<注>

- 1) 中央教育審議会答申 2014年 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」。
- 2) キー・コンピテンシーの3つのカテゴリーの訳は、『〈新しい能力〉は教育を変えるか』(松下佳代編著 2010年 ミネルヴァ書房)による。
- 3) 本稿の図表の数値は、すべて%を表している。
- 4) クロス分析にあたってはカイ二乗検定5%水準で有意差の判定を行い、「差がある」「差がない」「～の方が○○である」「傾向がある」等と表記している。
- 5) 荻谷剛彦 2001年 『階層化日本と教育危機』有信堂。
- 6) この考え方の詳細については、西島央「音楽—学校に音楽を取り戻すために—」(小松佳代子編 2012年 『周辺教科の逆襲』叢文社)を参照のこと。

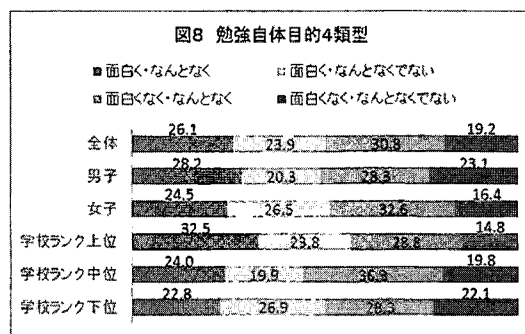
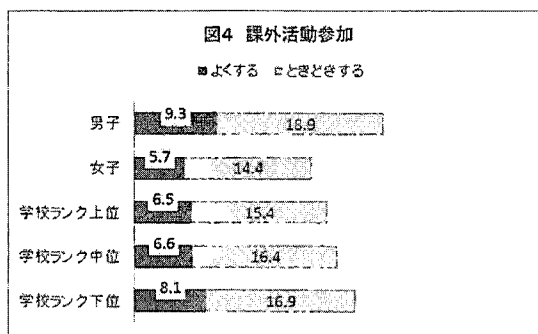
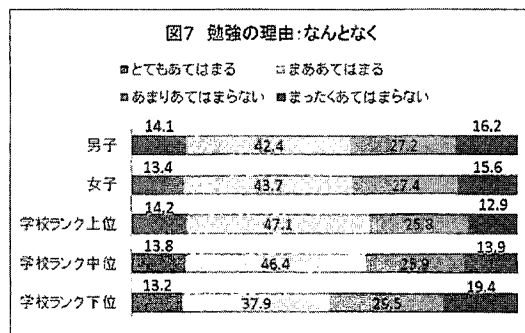
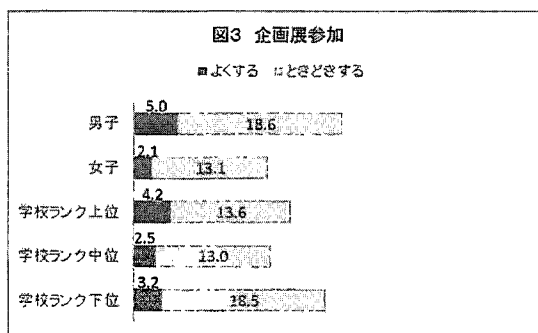
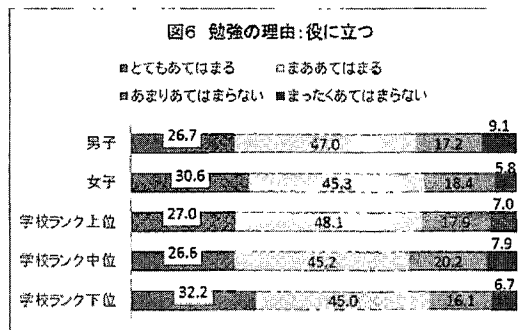
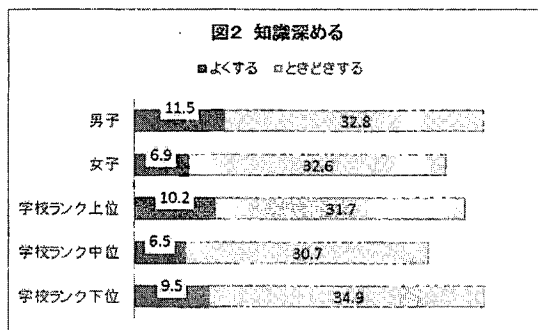
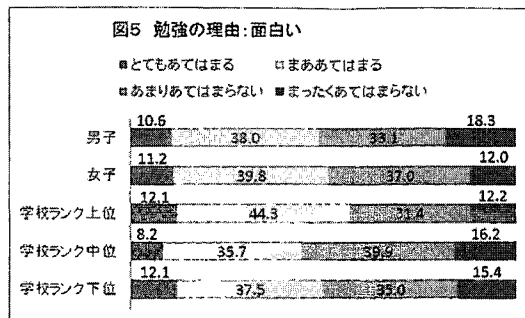
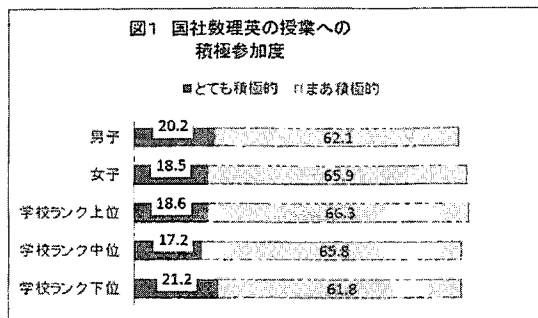


表1 「役に立つ」別にみた「勉強自体目的」4 類型

	面白く・なんとなく	面白く・なんとなくでない	面白くなく・なんとなく	面白くなく・なんとなくでない
とても役に立つ	30.8	37.1	17.5	14.6
まあ役に立つ	28.0	21.1	35.1	15.8
あまり役立たない	19.5	17.4	40.1	22.9
まったく役立たない	11.4	6.3	33.1	49.1

図9 「勉強自体目的」/将来的有用性別にみた
授業積極参加度(とても積極的)

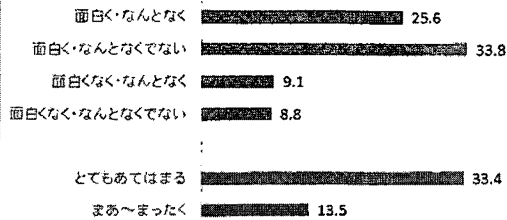


図14 「自然すばらしい」別
授業に「とても積極的」

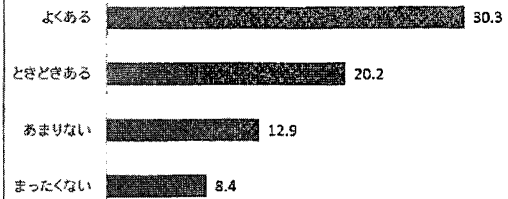


図10 「勉強自体目的」/将来的有用性別
「知識深める」(よくする)

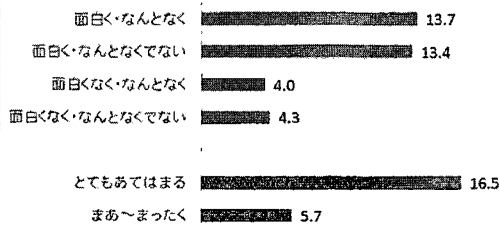


図15 「自然すばらしい」別
「知識深める」を「よくする」「ときどきする」

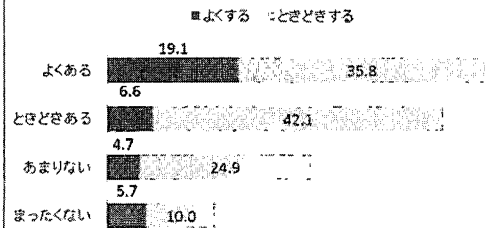


図11 「勉強自体目的」2類型×将来的有用性別
授業に「とても積極的」

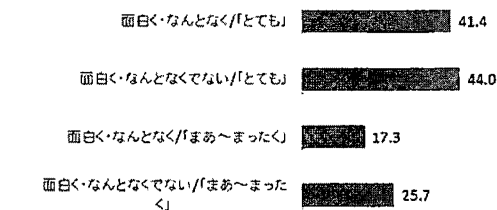


図16 博物館に行く経験別
「自然すばらしい」と感じる事

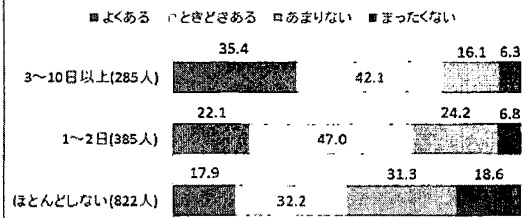


図12「勉強自体目的」2類型×将来的有用性別
「知識深める」を「よくする」

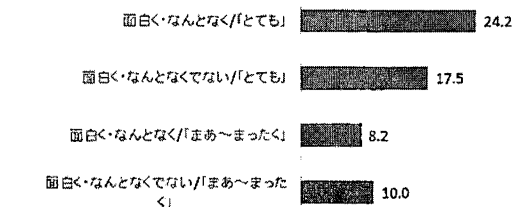


図17 博物館に行く経験別
「知識深める」を「よくする」「ときどきする」

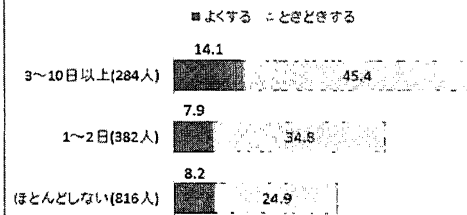


図13 勉強していて感じる事

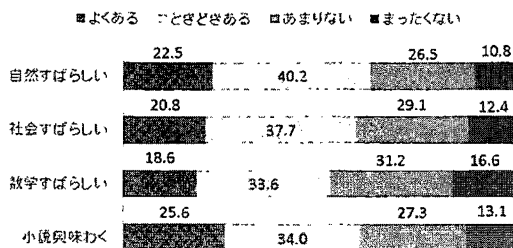


図18 家庭の文化階層別博物館に行く経験

